

面白い話だけじゃない落語家と



極力シンプルに

落語は「面白い話」であることが大前提ですが、それだけではない奥深さがあるのです。一人で二役・三役しながら登場人物の会話のみで話を進め、その名の通り、最後に「落ち（さげ）」で話を落として終わります。演劇などと違い派手な衣装や音響効果はなく、使うのは扇子や手ぬぐいのみ。極力シンプルな状態でしゃべること、いろんな場面や人物を想像してもらいように話すのです。

ネタは作者が分かっているものから不明のものまでさまざまですが、基本的には稽古先の師匠から教えてもらって披露します。今までに覚えたのは50〜60話くらいでしょうか。シンプルな状態でしゃべるからこそ腕が問われるので、お客さんをただ笑わせるだけでなく、「いい話が聞けた、いい時間が過ごせた」と思ってもらえるようにしようと心がけています。

味わったことない感覚

落語との出会いは、小学4年生の時でした。父親が友人からもらった落語のテープを偶然見つけたのです。何回聞いても飽きず、話の中と同じところで笑ってしまいました。とても面白かったのを

はつきりと記憶しています。その後岡大に進学し、自由な時間を使って何かしたいと思っていたときに落語のことを思い出し、「やりたい」ではなく「聞きたい」という気持ちで落語研究会に入りました。

学生でも師弟制度があり、3年生が師匠となり、入部した1年生に稽古をつける形でした。元々人前で話すのは得意ではなかったはずが、学生時代は自分でも驚くほど落語がよく受けました。大勢の人が自分の落語を聞いて笑っているのは味わったことのない感覚で、それからは夢中でいろいろな落語を聞き、研究するようになっていきました。

文枝師匠に弟子入り

卒業して企業に就職しましたが、落語家になりたい気持ちを抑えられず、退職しました。そのころ出会ったのが文枝師匠の落語です。理屈ではなく、雰囲気や流れを大事にするところに惹かれて弟子になりました。

運転手や身の回りのお世話など、付き人を7年ほどやりましたが、車の行き先も一日のスケジュールも、師匠から前もって教えてもらったことは一度もありません。運転手をしていて道を何度も聞くと「何でも教えてもら

桂 阿か枝

落語家 × 岡山大学農学部卒

五代目桂文枝の最後の弟子(20番目)。大阪市にある寄席「天満天神繁昌亭」や地元・兵庫県明石市などで定期的に落語を披露している。今年7月に文枝の名を継ぎ「六代桂文枝」となる桂三枝は兄弟子にあたる。



▲繁昌亭

- かつら あかし (41歳)
- ▶1971(昭和46)年 兵庫県明石市出身
 - ▶1994(平成6)年 岡山大学農学部卒
 - ▶1996(平成8)年 5代目桂文枝に入門(最後の弟子)
 - ▶2006(平成18)年 第43回なにわ芸術祭「新進落語家競演会」新人奨励賞
 - ▶2009(平成21)年 第46回なにわ芸術祭「新進落語家競演会」新人賞

客を呼べる「看板」に
若い時は前座で落語会に出る機会が多かったのですが、年齢を重ねるとそういう段階ではなくなり、いまは繁昌亭の定席や地域の落語会を中心に活動しています。将来は東京や大阪のような大都市で独演会をしたいです。都市部での評価を高め、岡山や明石など縁のある地域でも披露していけたらいいですね。「桂阿か枝」という名前を大きくし、看板として出してもお客さんに喜んで来てもらえるようになりたいです。

小学生の私がたまたま聞いた落語にのめり込んだように、今度は私自身が誰かに夢を与えられる落語家になりたいと思います。

卒業生
その人に聞く

